

設立 平成24年 5月15日
開塾 平成24年 9月 8日
発行 令和 3年 1月 9日
(93号)

中興二五ノ一

[事務局] 〒648-0094
橋本市三石台4-1-15
TEL 0736-38-3669
FAX 0736-38-3680
発行 學塾・中之島事務局

人間学講座
第98講

「命の国づくり
——百年の計」
上甲 晃先生



■ 肚をくくる

今年はコロナで大変でしたが、青年塾の講座は九月から再開いたしました。不安の声もあがりましたが、車で言え

ば、感染防止で停止している状態というのは、この先の危険を案じて車のブレーキを踏んで止まっ

ている状態。ブレーキを踏み続けていると車は前に進まないどころか、バッテリーがあがってしまいます。肚を括ることが肝心。頭で考えたと計算

や打算で人の弱さが生まれます。所詮考えて迷ったところでしょうがない。肚を括れば困難がその後よかったことになる。幸之助の言葉に「志あればいかなる困難もすべてはチャンス」とあります。

見方を変えれば今は大チャンス、私の口癖は「コロナ進化」です。コロナだったお蔭で、というものを生み出さなければ値打ちがない。できないことを嘆いても仕方がない。できることを考えろ、と。

■ 眼前の破局は天の啓示

この二ロナの自肅期間に『松下幸之助発言集』全四五巻に挑戦しました。その中で幸之助は「眼前の破局は天の啓示であり天訓である」と言っています。昭和二十年八月十六日に社員に向かつての訓示の言葉です。戦争に負けたその翌日、みんな途方に暮れ路頭に迷っていたであらうときに、幸之助はこの言葉を言っているのです。日本人の精神の原点に戻れ、本来の日本人の姿に戻るならば、必ずや我々は平和産業において隆々たる繁栄をもたらすことができるだろうということを終戦の翌日に伝えているのです。困難はチャンスといえ、ここまでの困難を天啓と受け止め奮い立つ、というその姿に一番感化を受けました。どんな困

難も、天啓であり天訓、今回のコロナもそうに違い、ない、そうした受け止め方をすることで、コロナを活かすことが、我々に課せられた大きな課題

でしよう。時が経つたのちに、あのことがなければこんな会社にはできなかった、こんな気づきはなかった、そのためには、これは最高の自分を見直すチャンスだと思えるのです。

この発言集を全巻読み通して、幸之助の考え方が頭にではなく肚に落ちてきました。

だからこの秋から青年塾を始めることを決意したので。御神輿はいったん置いてしまふと重くて再び持ち上げられないように、なんでもいったん休んでしまふと、もう一回やろうとしても同じようにはいかない。意欲も思いも途切れてしまふ。このまま休めば青年塾はつぶれかねない、何年後かとなれば、私も年を重ねて身体の状態もわからない。それならば、気力もあり足腰も立つ今に、命を懸けよう、そう思いました。

開講を危ぶむ声の中、青年塾を再開するにあたって、塾生には不安なことを全部書き出して、それらを解決する手立てを考えてもらい、彼らなりに完璧な感染対策が施されての実施になりました。

終わつたときの塾生の晴れ晴れとした顔と達成感。困難を乗り越えたときにこそ達成感が生まれるという生きた勉強にもなりました。闇雲に実施するのではなく、完璧なる備えをもつての挑戦はとても大切なことです。コロナには感染しなかったが社会が死んでしまった、ということにしてはならないのです。

■ 宇宙根源の法則

どんな困難も見方を変えればチャンスではあります。志があれば」が前に付きます。志がな



ければ困難は困難のまま、苦しみだけです。だからこそ、ここで問われるのは「志」。志とはある意味では「使命感」でしょう。さらに言えば「何のために生きているのか」という根本的、本質的な問題となります。私の生きている目的とは何か。行き先の書いていない電車には誰も乗らないように、人生もまた同じです。この世の中のために自分は何をしようとしているのか、決して大げさなことなどでなくてよい。身近なことでもよいので、「このために生きている」とする目的が大切なのです。そしてまた、このコロナを通じ、「何を信じていきているのか」が重要となります。信じる力とは、戦後教育において、一番断ち切られた力かもしれません。目に見えるお金の力を信じる人は多い。現代人は、目に見えないものを信じる力を失ってしまったのではないか。それが精神的な弱さに繋がりはしないか。信じるものを持たないというのは、生き方に迫力を持たないのです。この知識偏重社会、そして目に見えないものを信じられないというのは、戦後教育を受けてきた世代の不幸です。これは日本の根っこを断ち切ろうとしたアメリカ進駐軍の教育政策に関連しています。それが今、我々の弱さになってはいないか？。なぜ、あらゆる逆境、困難はチャンスとなるのか。幸之助の思想の原点は「宇宙根源の力は万物生成発展の法則で働いている」。だから、世の中で起こることがどうあってもすべての姿は発展の姿である。

京都の真々庵に根源の社があります。幸之助は毎日その「根源様」にお参りをしていました。祈っていたのは二つのこと「感謝」と「素直」です。宇宙根源の法則は発展の方向に動いているから、ただ感謝しかない。そして素直になるとはすべてを受け入れるということ。真理に素直になりさえすればすべてはうまくいく、と幸之助は確信していたのです。

(抄録 中川千都子)

《リモート講座体験談》

リモート参加に寄せて

近藤宏枝 世話人

何もかもが、誰も経験したことのない状況下の中で「人間学塾・中之島」は、九月に入塾式を迎えました。私は、世話人というお役を頂いていても、四国で社会生活をしている者として、出掛けていくことは難しい状況にあります。それでも塾生の皆さんと共に学ぶ手段として、出席が叶わないここ数ヶ月は、加藤昌夫さんのお世話で、Zoomミーティングを使つての読書会を開催して頂いています。

私は平成十六年に、「天分塾」七期生として入塾して以来、毎年十二月は上甲晃先生のご講話を拝聴して、その年の締め括りにしていました。それが今期は出席が叶いそうにないけれども、諦めきれない思いで一杯でした。

更に大阪に「外出自粛要請」が出て、塾の開講自体も危ぶまれ、世話人の方々とWEB上での討議を交わし、最終的にはスケジュールは講師講話に限り、会場とリモート両方での開講となりました。塾生の方々にもその旨を、世話人が手分けして連絡を致しました。

いよいよその時がやって来て、タブレットの前に座り接続すると、懐かしい中之島の会場が映し出されました。そして笑顔で言葉を交わせた事は、リモートとはいえ、自分も会場に居るかのような錯覚を覚えました。

司会の福本浩之さんが「立腰」の言葉を発せられ、いつもの塾の始まりです。私は正座で画面の前に座り、静かに目を閉じました。

それから、人間学塾・中之島の歌「ああ 中之島」が流れ、会場の方々は心で、私達遠隔地の者は声を出して歌い始めました。私は

「共に手を取り ああ中之島」の歌詞に、胸の詰まる思いがしました。寺田一清先生が作詞をされたこの歌

には、塾生が「共に学び、共に育つ」と希われた心がこもっています。

上甲先生の「青年塾」も、九月からスタートでした。今回のご講話で、コロナ禍の中で学ぶのは、生きた勉強が出来るのだと話され「やる気になれば知恵が出る、力が出る、勇気が出る」とのお言葉も頂き心に刻みま

した。会場で体感するのが最良なのは、誰もが分かっていることですが、それが叶わないならそれに替わる手段を使つて、塾生の方々と時間を共有したいと思います。そして皆で手を携えて、これから起こる事態に立ち向かつていければと思っています。

リモート開催ありがとうございます。

清林由佳 塾生

いつもお世話になりありがとうございます。12月の人間学塾は、リモート(Zoom)で参加させて頂きました。感謝と共に、体験談を共有させて頂きます。

私の自宅は、中之島からは1時間強ほどのところにあり、通常でしたら現地に行かせて頂くのですが、12月に入り感染者数が増加している事から、家族が心配しており、今回リモート参加とさせて頂きました。

Zoomは、以前にパソコンにダウンロードしてしましたので、加藤様からメールで送って頂いたリンクをクリックするだけで、思いの外簡単に「非日常空間」に繋がりました。とても上手く撮影して下さっており、まるで目の前の窓から中之島のホール内を見ているようでした。「ああ中之島」の歌もその場にいるようで、上甲 晃先生のお姿やお声も、ハッキリと聞き取ることが出来ました。

感染防止以外に、リモートで参加して良かったと感じた点は、家にいながらの参加なので、開始時刻直前ま

で子供達の相手や家事などが出来る事、またマスクをしなくても良いこと(私はマスクが苦手なので、マスク無しでいつもより集中出来た気がします)、ちよつと体調悪いなど思っても遠慮なく参加出来る点などです。

逆に11月までの現地参加で良かったと思う事は、何より他の参加者の皆さんにお会い出来る事、また講師の方と同じ空間に居られる事、そして関連書籍をその場で購入出来る事(いつも持ってきて頂きありがとうございます)などかと思っています。

状況に応じてどちらも使い分けられるようにして頂き、世話人の皆様には心より感謝申し上げます。現地開催+オンライン中継ですと、世話人の皆様には二重にご苦労をおかけしている事と思います。何か手伝える事などありましたら、どうぞお声をください。今後ともよろしくお願い申し上げます。

会場と同じ気持ちで・・・!!

中村美智留 塾生

私は今回の試みに大変感謝しております。事務局に直接お願いしましたし、今後ぜひお願い致します。今の状況では私の仕事の立場上、JRに乗って大阪駅の人混みを通して、いくら会場が気をつけて下さっていても中之島迄行くことは考えられません。

私の娘婿の勤務先は大阪駅周辺ですが、周りに感染者情報が増え、先週から週3日(4日)の自宅リモート勤務になりました。

よつてこの状態で講演が続くなら、Zoomを断固お願い致しますし、それが無い場合は返金をお願いしたいくらいです。

先日映像は大変環境よく、会場同様の気持ちで受けられた事、ご尽力に大変感謝致します。

ご意見聞いて下さつてありがとうございます◎どうぞ、これからもよろしくお願い致します。

《森信三先生に学ぶ「陰徳下座の行」》

◆なぜ「下座行」が必要か

森信三先生の『全一学』五部作の一つとして、『情念の形而上学』という著述があります。情念とは、仏教的にいえば、煩惱で、俗に言う心の癖性分です。この情念の種々相を分析されたあとで「情念浄化の方途」を説いておられます。

ここにも森先生の大慈悲心が感じられるのですが、八つお上げお挙げになった中に、畏敬・立腰・慎言・下座・耐忍・明知・心願・布施奉仕の中に「下座の行」を加えておられることは見逃すことはできません。

その書のなかでも

★そもそも一人の人間が、その人の真価より、はるかに低い地位に置かれていながらそれに対して毫も不満の意を表さず、忠実にその任を果たすというのが、この「下座行」の真の起源と思われる。

★下座行とは、一応、社会的な上下階層の差を超えることを、体をもつて身に対する「行」といえる。

例えば「高慢」というごとき情念は、自分の実力を真価以上に考えるところから生ずる情念といつてよからうが、もしその人に、何らかの程度でこの「下座行」的な体験があったとしたら、その人は恐らく、高慢に陥ることを免れうるのではあるまいか。とおっしゃるのです。

「小慈小悲もなき身にてみだりに人師を好むなり」と述懐せられたのは親鸞上人でしょうか。人の師たる人とはとりわけ、この下座の体験者であり、下座の行者であることが、何より大事なことであることだけは、このわたくしにも納得させられます。

ある時、先生にお尋ねしたことがあります。「どうして先生は、隠れた真人の発見者であり、発掘者でいらつしやるのですか」と申し上げると「それは舞台に立つて

から眺めておるとわからぬのです。同じ平面の平土間に立つと、よくものが見えるのです。」とおっしゃられました。

アンダースタンド (under-stand) とは、理解すると言いますが、下に立つという意味にもとれると、どなたかから聞いたことがあります。三ヶ月後に近くの廃屋に転じ、

森先生は、七十七歳にしてかつてない不慮の逆境に遭遇せられた際、期限付きで立ち退き寸前の家屋に單身投ぜられ、みかん箱を食卓に、独居自炊の日々を送られたことがありますが、こうした境遇にあつて、真つ先に心掛けられたことは、地域の方々へのあいさつであり、郵便局への途中のゴミ拾いであつたのでした。

いまこうした日々の下座行の姿を、思い出さずにはおられません。

◆布施・愛語・利行・同事

道元禅師が、菩薩の生き方として、布施・愛語・利行・同事を挙げておられます。布施や愛語については、説明の必要はないでしょう。利行とは、利他行です。同事とは、やや解しにくい言葉ですが、道元さんの説明からお察しするに、わがこととして仕事を同じくし全面的に支援し同化するということです。これが菩薩の生き方なのだと思えます。

森信三先生も、随分とご生涯において、陰徳布施行を積まれたことと思われます。

先生の尽くされた布施行については、いろいろ知るよしもございませんが、物心両面に於いて支援なされた事実も漏れ聞くのみです。

ただわたくしが眼前にし確認しておりますのは、道縁につながる同志の出版に当たっては、その相談にあずかり、細かい点を指示せられるばかりか、原稿に目を通され、一字一句の補訂まで施されたことは、数限りなく、わたくしもその一員であつたことを思い、煩わ

しいご迷惑をお掛けしたことをお詫びするしだいです。先生は、深い一念から発する心願より、縁ある方に、自伝の出版を勧められ、また実践記録や、文集のまとめ等、強くご推薦せられた関係で、この出版に当たっては全面的に支援せられ、請われるままに、「序文」をおいといなく執筆せられ、その数は二百編を超えております。

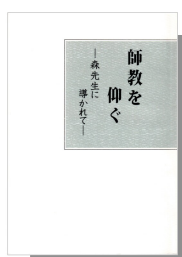
そして序文の内容に至つては、まことに、炯眼透徹奮起せしめずにはおかぬもので、愛語よく回転の力あるを証するに足るものです。なお、言葉の慎みについては、良寛戒語や慈雲尊者の十善法語をもつて自戒とせられ、道元禅師の説かれる「愛語」をもつて、貫かれた一生と思われまふ。

ある時、承つたことですが、AさんからBさんのことを褒めたハガキが先生の元に届けられた時、そのハガキを折らずにBさんに送るために、白の横封筒の用意をしているのですと、お聞きしました。

「むかひてあいごをきくは、おもてをよろこばしめ、こころをたのしくす。ぬかはずして愛語をきくは、肝に銘じ魂に銘ず。云々」とありますが、愛語の実践者としても、及ばざることにはるかに遠きことを痛感してなりません。

『師教を仰ぐ 森先生に導かれて』

寺田一清 著より抄録



《リモート講座体験》



《人間学塾・中之島》

令和3年2月カリキュラム

＊日時 2月20日(第3土曜)

午後1時～5時

＊場所 大阪大学中之島センター(10F)

＊講師 横田南嶺 老師

「禅の教えに学ぶ」

1966年 和歌山県新宮市生まれ。

1983年筑波大学に入学。東京都文京区白山道場龍雲院 小池心叟老師について出家得度。1987年筑波大学卒業、京都建仁寺僧堂、円覚寺僧堂にて修行。円覚寺足立大進老師に嗣法。2000年臨済宗円覚寺派管長に就任。『祈りの延命十句観音経』『二度とない人生だから今日一日は笑顔でいよう』など著書多数。

《芳信抄》

東京都 鍵山秀三郎先生

高山良二先生の偉大なお取り組みを教えて頂き誠に敬服致しました。正に命がけの仕事でカンボジアの住民のために奉仕され敬服いたしました。

令和3年1月9日は、木南一志様が人間学塾でお話しをされるとのこと、実践に基いたお話しで、学ぶことが大きいと思います。

埼玉県 山下武彦様

高山良二先生の「地雷原の村での戦い」の土台が、単に地雷処理に留まらず、その地の原住民の今後の生活の支えとなり、平和の種になること、に在るところに感銘しました。それだから簡単に帰国できないのです。このような志が実現するところに、日本への信頼も確立すると思います。

「念ずれば花ひらく」の674番の前に再度タンポポを植え、はがき代の立て札を立てられたのが、貴殿であつたとのこと、またその誌が素晴らしいです。

宮城県 加藤秀夫様

高山良二先生のご講演は、カンボジア国での地雷処理、また現地での「自立復興」に尽くされる高邁な精神に大きな学びを感謝申し上げます。

埼玉県 大出雅一様

高山良二先生のカンボジアでの地雷処理のお話しからたくさん学びが得られ有難いことでした。地雷処理という一歩間違えば命に関わる危険の上な仕事を恐れたり、敬遠したりせずむしろ楽しんでやっておられるという言葉に心揺さぶられました。カンボジアの村が安全になり、村の人がもう少し人間らしい生活が送られるようになるまでは、自分の

仕事は終わらない、使命感が自分を納得させないうちは、カンボジアを去らせなかった。このような方が存在するのは、日本の誇りです。

岡山県 柴田久美子様

寺田先生、鍵山先生の文章にふれて背すいを伸ばす私です。中之島ニュースを通してお導き頂けますことに心から感謝しています。

愛媛県 桂 誠司様

講師の高山良二様は、同県人で誇りに思っております。でも全国的にはあまり知られておらず残念なところです。

愛知県 坂部智一様

先月の中川千都子様に続きまして、今回高山良二先生のお話を拝読させて頂きました。支援する心を学びました。カンボジアの人たちのことを考えて、自分とは「日本人の土台を変えていこう」と希望が見えました。

奈良県 角高憲治様

コロナ禍で世の中が一変した2020年もあとわずかですが、今月はリモートで上甲晃先生のお話を聴くことができましたが、その時の関係資料をお送りいただき、誠にありがとうございました。一月の木南先生のお話もリモートで参加したいと思えます。ワクチン等で来年は違った形になると思いが、ピンチはチャンスです。

愛知県 稲垣孝志様

寺田一清先生の揮毫、剣道の教えに解説が素晴らしい。どんな厳しい冬も必ず春が来ます。その日の為に今日の一步です。